

修士 (2020 年度)

## 日本のストリートダンスにおける象徴的闘争とその普遍性について ——ダンススタジオにおけるエスノグラフィーに基づいて——

胡 驍

### 1. 研究の背景および目的

1970 年代にサウス・ブロンクスで生まれたヒップホップ文化は今、世界範囲で流行している。ヒップホップ文化はラップ、DJ、ブレイクダンス、グラフィティという四つの要素によって成り立つと言われている。ストリートダンスの分野では、有名ダンススクールが映画と番組を通してアメリカでヒットして、ストリートダンスのビジネス化は始まった。それから、映画やオリンピックの閉幕式の中のストリートダンスシーンは世界的規模でブームとなった。さらに、日本では 1990 年代にダンス番組が出現し、二度目のブームが起きてもいる。2008 年に発表された学校教育でのダンスの必修化を経て、2015 年に日本の「ダンス人口」が 600 万人に達するまでに至った。

ここにみられるような、ストリートダンスのビジネス化、グローバル化、ローカル化の中では、実際、多くの論争が発生している。排除された黒人スラム地域から生まれたストリートダンスが巨大化するに伴い、異なる文化的背景を持つストリートダンスの実践者たちは、さまざまな新たな実践の方法を生み出した。このような現状において、いったいどのような論争が生じているか、そして、なぜこのような論争が発生しているか。以上のような背景と問題意識を踏まえ、本研究の目的を、「日本におけるストリートダンサーの実践方法とそれにより起こっている論争」を明らかにすることに設定した。

### 2. 先行研究

日本国内におけるストリートダンスに関する研究は、主にスポーツ、舞踊、都市空間、芸術性、医療などの方面から行われてきた。社会学的視野から分析した論文に有國 (2018) がある。有國 (2018) は、ダンス必修化の現状の分析から、教育に組み込まれるストリートダンスの教育現状の混乱を明らかにし、それはプロダンサーの収入に至るまで影響があると述べ、元の黒人ルーツの文化的機能が薄れていると指摘した。また、有國 (2019) は同じ一つのヒップホップ文化として扱われるラップにおける文化資本の差異による象徴的闘争 (Bourdieu 1979=1993) があるとし、このような文化を研究するため、実践者たちによるオリジナルとローカルの文脈の両者の間での模索と相互作用に注目するギルロイ (1993=2006) の「経路」という考え方の持つ意義を指摘した。ダンス必修化の現場の混乱と文化的機能の変化を含め、ストリートダンスにおける多くの論争は実質的に象徴的闘争であり、このような論争が発生する条件を実践者たちの実践方法から解明することが可能である。

### 3. 調査と考察

これを踏まえて、東京都渋谷にある DW ダンススタジオにて参与観察を行い、日本スト

リートダンサーの実践方法を解明したい。本研究の中では、実践者たちはレッスンと日常練習という二つの集団を結成していた。本論文は彼ら（12名）の参加動機、集団形態、集団行動から日本ストリートダンサーの実践方法とそれによる象徴的闘争の発生について分析を行った。

日本ストリートダンス実践者たちの参加動機を見ると、主に学歴、生育環境、経済状況、親友、ファンダム、フィットネスが大きな要因となっている。ヒップホップ文化が好きだからストリートダンスをやりたいという答えは少ない。そのため、アメリカでは政治にまで影響があるヒップホップ文化は日本のストリートダンス圏においてどのような文化的機能を持つかを再検討する必要がある。彼らの集団形態を見ると、現代の都市下位文化の若者の集団の形態は、1980年代暴走族のように必ず「卒業」ということがないことは確認できる。ストリートダンスは今よりハビトゥス化されており、実践者たちの集団は脆弱性、不確実性と流動性という三つの特徴がある。路上だけではなく、彼らはダンススタジオ、レンタルスタジオ、家、学校、ショッピングプラザなど多数の場所で活動している。実践者たちの集団行動は主にレッスン、練習とイベントに限る。このイベントには、ショー、コンテスト、フェスティバル、バトルというような形態がある。

また、各自の文化的背景や価値観によって独自のストリートダンスに対する認識が構成され、既存のストリートダンスのやり方あるいはほかの実践者たちのストリートダンスに対する認識をめぐる論争が発生することも確認された。このような論争の要素は、特にバトルイベントの中では顕在化するが、他の「場」においても存在している。例えば、ダンスバトルにおいて暴力やリスクをめぐる論争以外に、プライベートレッスンやダンスの教師の資格をめぐる論争もある。このような、一つの物事をめぐる「正統性」や「真正性」の論争は、象徴的闘争に該当するものである。そして、どのようなことについても「正統性」の論争があるので、象徴的闘争は実際多数存在すると考えられる。本論文ではまた、ユーチューブの動画資料を使って、このような象徴的闘争は日本のストリートダンスだけではなく、世界中においても普遍性があることを示した。

本研究は、エスノグラフィーを通して、ギルロイの「経路」という考え方を応用することで、日本のストリートダンス実践者たちはヒップホップのモットーを口にしながらも、ビジネス化に大きく影響されていることを明らかにした。そして、文化内部の象徴的闘争を見ることは、その文化の特徴を見ることができるという研究角度的発想を提供する。

#### 参考文献

- 有國明弘, 2018, 「ストリートダンスの日本における展開——ダンス必修化をめぐる国内の動向に着目して」『市大社会学』15:39-59.
- , 2019, 「スニーカーにふれる」ケイン樹里安・上原健太郎編 『ふれる社会学』北樹出版, 47-56.
- Paul, Gilroy, 1993, *Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*, Verso Books (=2006, 上野俊哉ほか訳 『ブラック・アトランティック：近代性と二重意識』 月曜社.)
- Pierre, Bourdieu, 1979, *La Distinction: Critique sociale du jugement*, Les Éditions de Minuit (=1993, 石井洋二郎訳 『ディスタンクシオン〔社会的判断力批判〕I』 藤原書店.)